三井忍教授

追悼文集

三井忍教授

追悼文集

若かりし日の　三井忍君

—東北大学理学部大学院時代—

昭和45年３月、学位記（理学博士）授与式場の御夫妻

目　次

三井忍教授略歴・主要研究業績

略　　歴……3

主要研究業績……4

弔　　辞

高知大学文理学部長　西沢　弘順　9

高知大学文理学部地質学教室代表　甲藤　次郎　12

同　学生代表　萩原　一憲　14

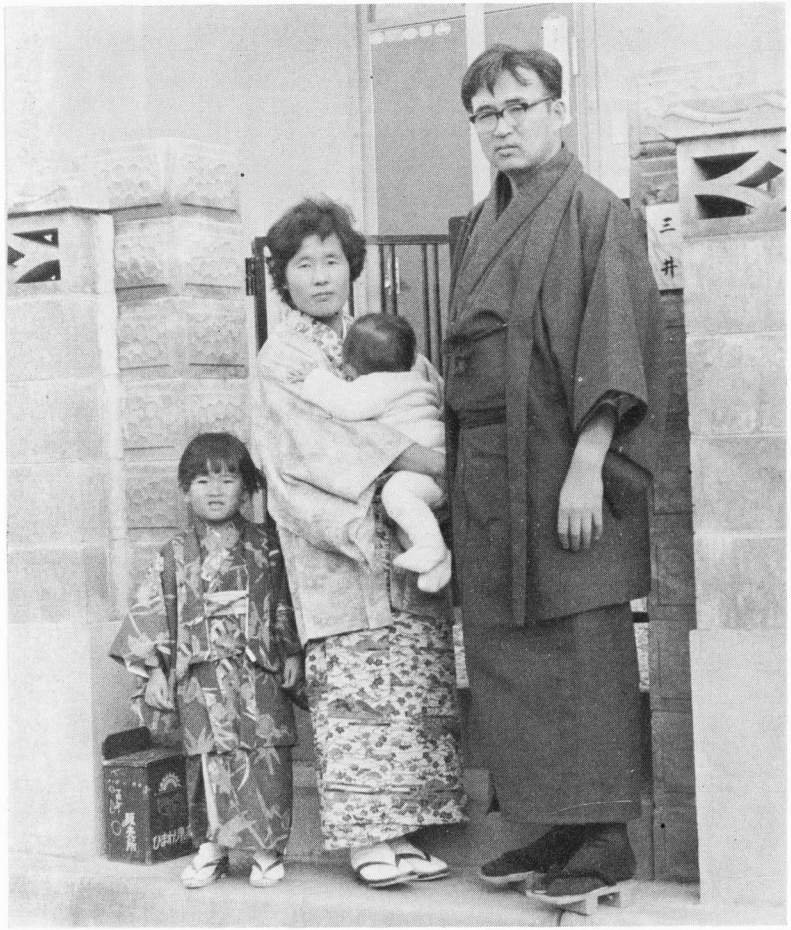
三井忍君を偲ぶ

御家族から

忍　と　私……兄　三井　靱　19

忍の死去に際しての皆様の御厚意に対するお礼と

相変らざる今後の御同情に対するお願い……父　三井　三郎　22



昭和50年1月、高知市瀬戸の自宅で

研究仲間から

三井忍君を失って……工業技術院地質調査所　星野　一男　29
三井さんのこと……新潟大学理学部　植村　武　31

高知大学地質学教室同僚から

故三井忍教授を偲んで —桂浜の五色石—……東　正治　36
高知大学教授理学博士三井　忍氏を悼む……梅村　隼夫　39
三井　忍さんの事……波田　重熙　43
三井　忍氏の想い出……満塩　博美　47
三井　忍君を偲んで……鈴木　堯士　49
三井君、さようなら……甲藤　次郎　52

東北大学院時代の同級生及び後輩から

三井　忍君を思う……埼玉大学教育学部　松丸　国照　55
三井忍さんの思い出……愛媛大学教育学部　速水　倶子　57

高知大学地質学教室在校生から

三井先生の思い出……藤井　文雄　60
三井先生追悼文……尼崎　敏行　61
三井先生の思い出……中川　仁志　62
三井　先　生へ……植松　洋子　65
三井忍先生の思い出 —死去を悼んで……大南　雅宏　68

高知大学地質学教室卒業生から

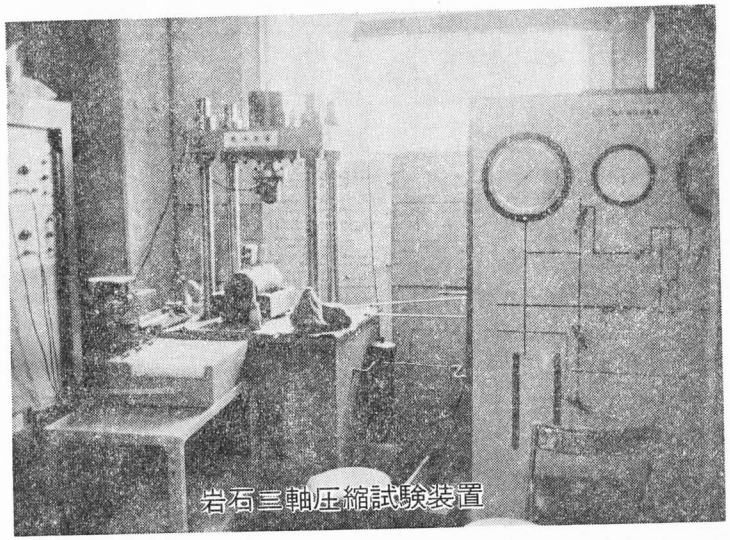
追　悼　文……上山(瓜生田)容江　77
三井　忍先生を悼む……伊熊　俊幸　79
恩師三井先生を偲ぶ……小出　和男　81
大きな三井先生と小さな私……佐藤　浩一　84
先生のこと……萩原　一憲　90
あとがき……95

三井忍教授

追悼文集

三井　忍教授

略歴・主要研究業績



岩石三軸圧縮試験装置

略　歴

昭和一六年　七月二六日	栃木県佐野市田島町三九八番地に生まる
昭和四〇年　三月	東北大学理学部地質学古生物学教室卒業・理学士
同　四二年　三月	東北大学大学院理学研究科（地学専攻）修士課程修了・理学修士
同　四五年　三月	東北大学大学院理学研究科（地学専攻）博士課程修了・理学博士
同　四六年　三月	東北大学大学院研究生（地学専攻）修了
同　四六年　四月　一日	高知大学助手（文理学部）
同　四九年　四月　一日	高知大学助教授（文理学部）
同　五一年一二月一五日	高知大学教授（文理学部）
同　五一年一二月一六日	激症性肝炎のため高知市民病院で逝去
同　五二年　二月一八日	正七位に叙せられる

主要研究業績

1. Stylolites from the Izu Peninsula, Shizuoka Prefecture, Japan: Tohoku Univ., Sci. Rep., 2nd. Ser. (Geol.), Vol. 39, no. 2, 1967.
2. フォッサマグナにまつわる第三紀問題—伊豆半島の層序問題（共著者：北村信・高柳洋吉）：フォッサ・マグナ（日本地質学会第75年秋季学術大会総合討論会資料），1968.
3. 地震に伴う自然現象と災害—青森県東北部における“1968年十勝沖地震”の実例について（共著者：東北大学理学部地質学古生物学教室災害調査グループ）：東北大地質古生物研邦報，No. 67，1969.
4. 平—小名浜間における小断層解析：東北大地質古生物研邦報，No. 67，1969.
5. 伊豆半島の地質学的諸問題（共著者：北村信・高柳洋吉・増田孝一郎・早坂祥三・菅原健・高橋邦夫）：東北大地質古生物研邦報，No. 68，1969.
6. 本邦産第三系の堆積岩の高封圧下における変形挙動(1)（共著者：星野一男・井波和夫・小出仁・岩村茂男）：地質ニュース，No. 192，1970.
7. Studies on the mechanism of deformation of sedimentary rocks in the Iwaki Area of the Joban coal-field, Fukushima Prefecture: Tohoku Univ., Sci. Rep., 2nd Ser. (Geol.), Vol. 42, no. 3, 1971.
8. 岩石物性と地質現象—常磐炭田石城地区を例として：地質学雑誌，Vol. 77，no. 5，1971.
9. 第三系堆積岩の強度・延性度の年代・地域による差異について（共著者：小出仁・星野一男・井波和夫・岩村茂男）：地質学雑誌，Vol. 77，no. 5，1971.
10. 常磐炭田泉地区の“多賀層群”について（共著者：大内啓司）：高知大学術研究報告，Vol. 20，自然科学，No. 10，1971.
11. Mechanical properties of Japanese Tertiary sedimentary rocks under high confining pressures (coauthors: Kazuo Hoshino, Hitoshi Koide, Kazuo Inami, Shigeo Iwamura): Rep Geol. Surv., Japan, No. 244, 1972.
12. 常磐炭田の地質構造に関する2，3の問題：岩井淳一教授記念論文集，1972.
13. On the origin of the joints in the Futaba Area of the Joban coal-field, Fukushima Prefecture (coauthors: Kazuo Hoshino, Tomoasa Hashimoto, Kazuo Inami, Akira Sakawa): Res. Rep. Kochi Univ., Vol. 21, Nat. Sci. no. 1, 1972.
14. On the so-called Taga Group in the Izumi-Ueda District of the Joban coal-field, Fukushima Prefecture (coauthors: Keiji Ouchi): Res. Rep. Kochi Univ., Vol. 21, Nat. Sci. no. 9, 1973.
15. On the Taga Group in the Yotsukura District of the Joban coal-field, Fukushima Prefecture: Jour. Geol. Soc. Jap., Vol. 79, no. 8, 1973.

弔

辞

16. Stratigraphy and geological age of the Taga Group in the Joban coal-field of Fukushima Prefecture (coauthors : Keiji Ouchi, Shinichi Endo, Yoshinari Hasegawa) :Res. Rep. Kochi Univ., Vol. 22., Nat. Sci. no. 4. 1974.
17. 室戸半島北東部の徳島県宍喰ー高知県野根間の地質（四万十地向斜における地層変形機構の研究ーその1）（共著者：甲藤次郎・小出和男）：高知大学研究報告，Vol. 23，自然科学，no. 16，1974.
18. 室戸半島東部の高知県野根ー佐喜浜間の地質（四万十地向斜における地層変形機構の研究ーその2）(共著者：甲藤次郎・小出和夫)：高知大学術研究報告，Vol. 24，自然科学，No. 2，1975.
19. 四国古第三系および白亜系の高圧物性について（共著者：星野一男)：石油技術協会誌，Vol. 40，no. 4，1975.
20. 仏像構造線とその運動によるテクトニック・レンズについて（共著者：甲藤次郎）：地質ニュース，No. 266，1976.
21. 四国西南部，中筋地溝帯以南の来栖野層について（共著者：甲藤次郎）：国立科学博物館専報 第9号，1976.

弔　辞

高知大学文理学部長
西　沢　弘　順

つい半月ほど前まで、朝倉のキャンパスであんなに元気なお姿を毎日拝見しておりましたのに、いまこのようにしてお別れの言葉を申し述べなければならなくなろうとは、本当にいったい誰が予想できたでしょうか。

あなたは忽然と、本当に忽然と私たちの前から去られました。私たちはいま、限りなく深い悲しみを抱いてあなたの霊前につどうています。

三日前の夜市民病院のあの部屋で、あなたが最後の生命力をふりしぼって、いまわしい病魔とたたかっておられる姿を見守りながら、ご家族の皆様、地学教室の先生方、また急を聞いて馳けつけたあなたの愛する学生諸君たちと一緒に、もう一度あなたが健やかな生命を回復することを、どんなに一生懸命祈ったことでしょう。しかし私たちの必死の願いは、ついにきき入れられませんでした。

あなたは昭和四十六年に高知大学に赴任してこられました。当時すでに理学博士の学位を得ておられ、お年に似合わぬといってよいほどのかずかずの優れた研究業績をお持ちでした。あなたは若い自然科学の学究としての、シャープで冷厳なひととなりの内面に、教育者としての情熱と豊かな人間性を湛えておられ、専門の研究に打ち込まれると同時に、深い愛情をもって学生を指導して来られました。みじかい年月ではありましたが、あなたが地学教室の中堅として、文理学部と高知大学の研究教育の水準を高め、その発展に尽くしてこられた功績はけっして小さくありません。

またあなたは教授会の一員として、大学の自治と学部の運営の民主化のために力を尽くされました。教授会の席などで、理に合わないことには決然として反論し、意見をのべられました。私はあなたが、末席に近い所で立ち上られて、物静かに、しかし毅然とした態度で一同にたいして自らの意見をのべられたお姿を、いま彷彿として瞼の中にえがくことができます。

たまたま文理学部が分離改組することになり、あなたは改組委員として、入院される前々日まで、しかもその夜おそくまで、その重責を果してこられました。おそらくあなたの

念願でもあったでしょう理学部の誕生を目前にして、あなたは病魔に倒れられました。あなたとしても、さぞかし残念だったことと思います。それ以上に、のこされました地学教室のあなたの同僚や、学部のわれわれにとっては大きな痛手です。これほど残念なことはありません。

私たちはいま、悲しみは深く、とめようもない哀切の情にうちしおれて、あなたの前に集っています。しかしもはや今は、これ以上の繰り言は甲斐のないことです。

私たちはあなたの遺されました志をついで、この高知大学であなたの情熱を傾けられました学問と教育のいっそうの発展のために、力をあわせ力を尽くしてゆきたいと思います。

あなたのご冥福を祈ります。

ご遺族の上に平安のあらんことを。

昭和五十一年十二月十八日

弔辞

高知大学文理学部
地質学教室代表
甲藤次郎

君は昭和十六年七月二十六日に栃木県で生まれ、昭和四十五年三月東北大学大学院博士課程を終了、理学博士の学位をうけ、昭和四十六年四月に高知大学助手として着任され、四十九年四月に助教授に昇任、文理学部教授に昇任直後に急逝された。日本の地質学界にとって誠に痛恨事である。

君の業績を省みるに、主要論文は既に二十一編をこえ、何れをみても学界の注目、おくあたわざるものがあった。特に昭和四十八年には君の申請した文部省科学研究費一、七七〇万円が採択されたが、このような高額の科学研究費が採択されたのは文理学部はじまって以来のことであり、如何に君の業績が学界の注目の焦点であったかが知られる。

この研究費によって購入された岩石三軸圧縮試験装置によって、高知県の地質解明は、

次々に発展をみた。

今後の華々しい成果を約束されながら、君はこの十六日に急逝された。

思えば、人一倍熱心な研究と来年四月に行なわれる日本地質学会高知大会の為の準備と、また同四月からの理学部独立の為の作業を率先して引きうけてくれた過労が、君の死を早めたのかもしれない。

然し私達には、君はまだ生きているとしか思えない。御家族、御親族にとってはお察しするに耐え難いものがある。

私達は、少なくとも学会が終了するまで、君の研究室はそのままでおく。

そして来年四月の日本地質学会で君との共同研究の成果を発表する。また私の手もとにある君の大作「室戸半島四万十帯における岩石の高圧物性とその構造地質学的意義」については、必ず印刷して成果を世に問うことを約束しよう。そして君の愛した学生諸君、同僚の追悼文を一冊の本にまとめて御親族・知人に贈ることを約束する。これは特に善枝ちゃん、巌君にとって、どんなにすばらしい父親だったかを知ってほしいからだ。

この約束ごとがすんで、私の涙が体からこみあげてくるだろう。

君は人間的にすばらしい人物だった。世俗に衒はず、自己の信念をもち、礼儀正しく、古武士の風格があった。もう一度君の松島音頭がききたい……。

理学博士三井忍教授の霊安かれと祈る。

昭和五十一年十二月十八日

弔辞

高知大学文理学部
地質学教室学生代表
萩原一憲

三井忍先生、先生が十二月一日入院されたと聞かされても、あの、精力的で強健な先生がと、少しも信じられませんでした。お見舞のベットの上でも、「退屈でたまらん」と、いつもと変らぬ大声で笑われるのを見て、すぐ御回復されると安心していた私達でしたのに、わずか二週間後の十六日、突然として御逝去されたことは、今だに信じられません。

思えば先生は、私達学生と、まるで兄弟のように親身になって話して下さいました。私達はそれに甘えて、私的な悩みをも遠慮なく御相談することもよくありました。

先生、覚えていらっしゃいますか。よく意見が合わない時など先生は真赤な顔をされて、どなる様にして議論されました。他愛のない未熟な私達の考えでも、決して馬鹿にされず納得がゆくまで説明して下さいました。

先生はまたたいへん子煩悩であられました。先生のお宅に伺った時の、お子さんとのお戯れの様子を見ると、思わず顔がほころんでしまいました。私達はそんな先生に、人間のあたたかさ、思いやりを感ぜずにはおられませんでした。

まだこれからだという先生が突然御逝去されたことは、非常に悲しいことですが、変わらぬ愛情をもって、これからも導いて下さるものと確信し、私達は、一歩一歩歩んでまいります。やり残されたお仕事など多々あり、心残りだと思われますが、私達は、出来るだけ先生の御遺志を受け継いでゆきますので、先生、どうか安らかにお眠り下さい。長い間、どうも本当に、ありがとうございました。

昭和五十一年十二月十八日

三井忍君を偲ぶ

御家族から
研究仲間から
高知大学地質学教室同僚から
東北大学時代の同級生及び後輩から
高知大学地質学教室在校生から
高知大学地質学教室卒業生から

高知大学朝倉キャンパス

御親族から

忍と私

兄　三井　靱

昭和五十一年十二月十六日病歿した弟忍の葬儀におきましては、西沢学部長、甲藤教授、鈴木教授をはじめ多数の教職員並びに学生諸氏に多大の御迷惑をおかけし、且つ御協力下さいましたこと厚く御礼申し上げます。十分な御厚意を受け、これ以上の甘えは許されまいと思っておりましたのに、今回、弟忍の追悼誌を発行下さるとのこと、文理学部の改組等お忙しい中を、甲藤教授をはじめ地質学教室関係者の方々のあり余る御厚意、御協力に対し御礼の申し上げようもなく、誠に感謝に耐えない次第でございます。本当にありがとうございました。

さて、忍も私も、もの心がついたときは終戦直後の物資の少ない時代で栄養失調気味であり、そのためかどうか忍はあまり動かず「村長サン」というあだ名をつけられたことがあります。大きくなってからもアダ名は的を射て、外向きは気前良く、内向きにはかなり

のわがままを通したものでした。そのような性格はまた忍にとっては大きく成長する原動力にもなっていたようであります。

私が大学で物理を専攻した動機は、父の進んだ化学が苦手であったことと、化学を専攻したとしても将来何かにつけ父と比較されることの恐れをきらったことによるつまらぬ考えにあったのですが、忍は化学が好きだったのでしょう。化学を専攻し、きっと父を乗越えてやると父と私の前で言った記憶があります。地質を専攻することは、当初不本意であったようですが、時がたつにつれ、未練がましいことも言わず専心したようです。

仙台での兄弟のアパート暮しは大変楽しい思い出であり、五年間の自炊生活で交互に食事を作ったことは、忍にして良くぞ頑張ったものと思う。

忍は地質、私は原子工学と、マクロとミクロの研究分野で話題が世間一般的なものになりがちなものだが、兄弟の良さであろう互いの話に耳を傾け、全く違った分野から好き勝手な議論を吹っかけ、酒が入るにつれ時には口喧嘩になったこともあった。しかし、ここでお互いに培われたことは、自分の専門を全くの素人にいかにわかり易く納得させるかであり、自己満足だけに終始しないことであり、その後の我々に大きな力となったことであ

ろう。

忍の話の中に今でもはっきりと残っていることは、ある時、東北地方の地図を広げて、岩手県から福島県に至るまで一本の線を引き「兄貴、断層線だ」と言われたときである。スケールの大きさに驚いてはみたものの、幾つかの点を押えて引く一本の線に対し「地質とは良い加減なものだなあ」と反論すると、徹底的に講義を受け、夜のふけるのも忘れて説教されると共に、最後は兄貴の研究はスケールが小さいとまで言い出して、また〳〵喧嘩になったことがあります。

忍から突然結婚するという話を聞き、これという世話もできずに互いに学位をとることに追われているうちに、忍は高知に行った。高知に行ってからの忍とは、電話での世間話に終ってしまい、学生を預かり調子のいいことばかりを言っていたので、はたしてまともに講義が出来るのかと皮肉ったこともありますが、忍の本来の持味が出て、人間として大きく成長したのは高知大学に行ってからと言っても過言ではありますまい。

その忍も二人の子供と妻を残してこの世を去ってしまった。一年前、学会の帰りとかで、重いリュックをかついで私をたずねて来た忍が、両親に先立つとは今だに考えられな

い。我々兄弟姉妹四人のうち、末の妹に続いて忍も去ってしまったことは、三井家及び我々姉兄にとってこの上もなく残念でならない。

しかし、私はこの悲しみをあえて断ち切ろうと思う。残された忍の二人の幼子の将来のために、兄として出来る限りの努力を傾けることで、忍との思い出を持ち続けたいことを追悼誌発行に際して御努力下さいました関係者の方々にお約束したいと思います。

最後に、高知大学理学部の今後の御発展と皆様方の御健康をお祈り申し上げます。

昭和五十二年三月十日　（平塚市纐六七六の一　住友アパート一五二）

忍の死去に際しての皆様の御厚意に対するお礼と相変らざる今後の御同情に対するお願ひ

父　三　井　三　郎

昭和五十二年三月二十日

今私達は、忍の残した妻妊枝子、長女善枝、長男巌の三人の今後の生活は、特別な事態

の生ぜぬかぎり、立派にやって行けると云ふ自信をもつ事が出来る様になりました。これは全く甲藤先生、鈴木先生、北村先生はじめ、皆々様の御尽力、御厚情により、妊枝子に就職の機会があたへられた事、遺族年金が受けられる様になった事、教授の地位や叙勲等々があたへられた事によるものであり、さらに今後に行なはれる三つの計画をも聞きましたが、これらは凡て残された三人が立派に生きられる物的、精神的基盤であります。この基盤の上に立てば、苦労は勿論ありませうが、この三人が立派な社会人に育つ事は充分に出来る筈であります。勿論我々親兄弟も及ばずながら最善の努力をなし、皆様の御期待に沿ふ事の出来る様になす所存であります。

教養学部が終ったとき、何を専攻すべきかに就いて相談を受けました。その時私は先づ第一に地質をやる事を推奨しました。忍ははじめ余り乗り気ではありませんでした。職に高下なし、まして大学の学業に高下の差なぞありやうがない。ただ一時代にかぎれば、その時の経済体制の下では日の当るところと当らぬところが出来る。現在は化学時代であり、化学をやった人間には所謂る日が当ったと云へませう。だがそれはどこまで続くでせうか？我々は一原子と云へども無からつくる事は出来ないし、又それを無にかへす事も出

来ない。科学技術の制約から、ごく一部の物質だけが工業的に利用され、経済的に利潤を生む。そのため、海洋を利用し、世界中から資源をかき集めて来て、見方によれば乱費に近い多量生産をやる。その結果は、必然的にこの狭い日本に非常に悪質な環境汚染がつくり出されたと云われる。十年以上前の事であるが、我々の工場を視察したロシヤの一技術者はルチル・イルメナイト中に含まれるバチジュム回収に就いて我々に執拗なディスカッションを繰返し、「日本はよいですね、ロシヤでは人間が地中から掘り出したものは一原子と云へども無許可で棄てる事は許されないのです」と云われた。目の前に多量に存在する日本の無機有機資源を主体として衣食住をまかない、不要になったものは無害の形にして日本の土地にかへしてやる。日本の化学化はそこまで進まねばならないし、そのためには地質技術者の協力が不可欠であり、従って日本の地質は諸外国と同じ程度、否それ等の国よりもはるかに日の当るところとなると云うのが私の考えでした。

将来は、斯く輝しい日の当る地質になると云ふ事だけで、或程度強引に納得させ、忍もその意気で地質に進んだわけですが、後で、フィールドに二、三回行って来てからの話を聞いて実はびっくりしました。もともと山が好きと云ふ性質の子でもない、あの子にとっ

てはフィールドの一人歩きは大変な苦労であった様です。マラソンの最後は孤独との闘いであるとはよく聞く話ですが、フィールドに入った地質者にとっても同じ様な厳しい孤独感との闘いがある、それは私にもすぐ理解出来た。又学問の対象は、私達の対象とは異なり、実に広大であり、従ってフィールドで得た結果をまとめる方法論と云ふものが、私達が考えるよりもさらに大事であると云ふ事も知る事が出来ました。後者の問題に就いては忍は逆にはりきって居った様ですが、前者の孤独感に対しては可成りこたえた様でした。忍と兄の靱は在仙時代一緒に自炊して生活したわけですが、その兄に云はせれば、フィールドに行く前には彼奴はいつもぼやいて居って、勢つけてやるのに苦労したと云ふ話でした。それらしいぼやきは私達も知らないわけでもありませんでした。

だが高知に行ってからは人が変った様に見受けられました。高知に行ってから約一年で、姉に高知に永住するつもりだ、高知に骨を埋めるつもりだと云ふて居ります。石の上にも三年とかやらで、フィールドにおける孤独感も或る程度克服出来る様になったのでせう。全く明るい顔で〝只今〟と云ふて、私達の前に姿を現はし、〝また来るよ〟と云ふて重いリックをかついで元気で家を出て行きました。

誰でも一人前になるには仕事の道でさんざん悩む筈です。特に忍は、この親に似て、孤独感の圧力に非常に弱い子でしたから、地質に入ってから三十六才の死までの間には、北村先生、甲藤先生、鈴木先生はじめ諸先生、同僚、学生の皆様には多大の御迷惑をおかけしたと考へて居ります。それにも拘らず身に余る立派な野辺の送り戴き、その上既述の如き、遺族三人が今後立派に生活できる物的、精神的基盤をあたへて戴いた事、親としてこれ以上嬉しい事はありません。ただ長い今後の生活です、皆様の相変らぬ御厚情によるガイドが必要です。今後ともよろしく願ひます。

以上

（尼崎市東浜町一　大阪チタニウム製造株式会社）

研究仲間から

三井　忍君を失って

工業技術院地質調査所
星野　一男

三井忍君の訃報を聞いてから早くも百日になろうとしている。失って初めて重味を感ずる人が私の乏しい人生体験のなかでも何人かいたが、日が経るにつれて、三井君が私の仕事の中で如何に大きな比重を占めていたか、日毎に痛感するのである。三井君は私にとって、気兼ねなく話し合える数少ない貴重な学友の一人であった。君との十余年にわたる交遊を振り返って、まず心に浮かぶのは、雄大な体軀に温和な微笑を絶やさぬ君の面影と、黒インクで几帳面な、はっきりした文字で埋められている君の手紙とである。

三井忍君と私が相識る機会を得たのは、常磐炭田第三系の地質構造の研究を通じてであった。それから、私は外地にいる事が多くなったが、どこにいても三井君の手紙は几帳面に私を追いかけて来た。その気楽さから、私は君の存在に馴れすぎてしまっていたようで

ある。

三井忍君の想い出は、今となってはすべてが思いもかけぬ悲運に対する恨みと怒りにつながってしまうのだが、とりわけ、今も私の机上に残されている君の遺稿のことはあまりにも生々しい想い出である。

私達の新第三系堆積岩の高圧物性の仕事は、一九七二年に地質調査所から特別報告を出版し得て一段落したが、その後、私の興味は古第三系と白亜系堆積岩へと移って行った。その頃、三井君も常磐の仕事に一区切りをつけ、四国四万十（しまと）のフィールドを始めていた。極めて自然に私達のチームは復活した。私が三井君と打合わせ、四国高知で彼と合流したのは一九七三年夏であった。室戸岬から四国東岸を北上し、屋島へ廻り、また、石鎚山をも訪れて、私達が採取した試料は文字通りジープに満杯であった。新居にも泊らせて頂き、三井夫人の温かいおもてなしも頂いた。この結果は一九七五年に、甲藤さん、三井さん、小出さんの高知大研究報告となり、また私達の石油技術協会誌論文となった。それからの私は、範囲を拡げ、造構運動の影響の小さい試料で、古第三系、白亜系の大きな物性変化を捉えることに熱中し、しばらく四国を遠ざかっていた。

三井忍君は室戸半島層群に、ひきつづき取組んだ。私が三井君から厚い封筒を受取ったのは翌年の七月上旬であった。前年発表した、四万十地向斜における地層変形機構の研究の続報（その三）の原稿と共に例によって黒インクでぎっしり書かれた手紙が在った。三井君たちはここで室戸半島層群の中の一部を地質構造のムードなどから新しい地層名をつけて分類し、高圧物性の差と構造の差を結びつけようとしていた。これは三井君ならでは出来ない仕事である。行間には三井君の清新なアイデァと若さが漲っていたが、私は多少余計な老婆心を加え、返事を書いた。その時、私は一ケ月の外国出張の直前で返事を送るまでには二ケ月余かかってしまったのである。しかし、三井君の第二次原稿は、私の返事のあと、こだまのような早さで送られて来た。これが十月ごろだったろうか。三井君の熱心さに甘えて、私も共著者のつもりで図なども作りなおした。その断りと例によって遅くなったお詫びで高知大学の三井君に電話をかけたのは十二月初旬であった。電話口の学生の人から、私は三井君が入院していることを聞いた。「直接電話しても構わないだろうか」と聞く私に「構わないでしょう」と電話口の人は答えてくれた。私はまず病状を聞こうと思って病院の受付の人に付添の人を呼んで下さいと頼んだのだが、出て来たのは意外

にも本人の三井君であった。これが最後に聞いた君の声であった。

「やっと終ったから送るよ」

「黄疸気味で目が使えないのです」

「それじゃ、すぐ送っても仕方がないね。病気の落着くころ、来年早々にでも送ろうか」

こんなやりとりをしたのを記憶している。その時には一、二週間ぐらいの入院だというような三井君の説明であり、私もその気でいた。

そして十二月十六日の訃報であった。まさに青天の霹靂とはこの事であろう。何故、私はもっと早く、君の入院前にでも私達の原稿を返送して上げなかったのだろう。最後の電話の会話を通じて、私は三井君がこの原稿にかけていた熱意を知っている。君はまさに中道で倒れたのである。

三井忍君と私達の仕事は文字通り境界領域そのものであった。この先人の少ない分野で、三井君という、かけがえのない人を失った我々の痛手は測り知ることができない。私にとって、君が屍を目前にしなければならないとは夢にも思いもよらないことであった。我々は三井君の遺志を大きく伸ばさなければならない。これが三井君の御冥福を約束する

最大の贈物であろう。

三井さんのこと

新潟大学理学部
植村　武

三井さんの訃報に接したのは旧臘十七日のことであったのに、あれからもう二ケ月余りの月日が過ぎ去ってしまった。翌日には地質学会の評議員会があって上京し、席上いつものように前回以後物故された会員について報告があり、黙禱が捧げられたが、その中に、既に三井さんのお名前のあったのは哀しいことであった。次の日から、たまたま私が会長を仰せつかっている構造地質研究会の集りがあったが、早速、会員である三井さんの急逝されたことを報告し、一同驚愕しつつ御冥福をお祈りした次第であった。

私が三井さんのお名前を知るようになったのはいつ頃のことであったか、はっきりした記憶はない。お互いに遠く離れていてお会いする機会の稀なこともあって、親しくおつきあいするということではなかったが、いつも論文別刷をお贈りいただいて来たし、私もま

た自分のものを差し上げて来た。たまたま一昨年の夏、非常勤講師としてお招きを受け、高知大学に参上したが、この時はじめてゆっくり話合う機会を得、同時に大へんお世話になったことであった。講義を終えた後、地質を見たいという私の希望に対して、酷暑の中をこころよく翌日から二日にわたって学生の佐藤・萩原両君と共に佐藤君の車で、室戸半島や佐川・横倉山・須崎などへ案内していただいたのは望外の喜びであった。桂浜寄りの新居にお邪魔して奥様やお子さん達にもお会いし、夕食を御馳走になって歓談したのがつい昨日のことのように想いだされる。昨年四月、信州松本の地質学会での再会が最後になってしまった。

三井さんが地質学の上に遺してゆかれた業績について私が云々するのは僭越であるかもしれない。が、しかし三井さんが一貫して追求された地層の変形の問題は互いに共通する研究課題であったことでもあり、あえていくらかのコメントをさせていただきたいと思う。

三井さんの仕事は、常磐炭田に関するものと四万十帯に関するものの二系列に大別してみることができる。前者に属する代表的なものとしては、一九七一年に東北大の理科報告

に載せられた英文の大著がある。東北大学時代の仕事の総まとめであろうか。この論文では、広域にわたる地質調査によって明らかにされた地質構造の記載、断裂系の分類、小断層の解析による応力場の復元などに加えて、高圧三軸試験の結果から岩石の強度と封圧や岩石の年齢の間の関係を論じ、断裂系の形成深度が推定されている。ここには、天然の事実と実験結果を理論的に結びつけて精密な構造解釈を行なおうとする考え方が見られ、それは私自身も常々心がけてきたことであっただけに心から共感をおぼえたことであった。同様な研究は一九七〇年のの地質学会の討論会「岩石・地層変形の現象と機構」での講演およびそれの論文になった翌年のものにも見られる。この頃の三軸試験のデータは、後に星野一男さん等と連名で地質調査所報告に英文でまとめられることになったものの一部であろう。断裂系形成の応力場の問題は更に双葉地域の節理について研究され、一九七二年の高知大研究報告（英文）では三つの形成時期が区別され、それぞれの応力場とその形成機構が論ぜられている。常磐炭田の研究はこれらのほか、多賀層群に関する一連の層位学的古生物学的研究がある。福島・茨城両県にわたる広域的な研究結果として、いずれの地域に於てもいわゆる多賀層群が不整合をへだてて上部中新統と下部鮮新統に二区分され

ることを明らかにされたもので、その総括は共同研究者と連名で一九七三年に高知大研究報告に書かれている。三井さんの興味はしかし、このような一見、純層位学的な研究にあっても常に構造地質の問題に向けられていたかに見え、例えば一九七二年の岩井教授記念論文集所載の論文その他では、多賀層群の時代決定は褶曲や断層の時期の決定にとって重要である点を指摘されている。

第二の系列の仕事は、甲藤教授らと共同で進めつつあった「四万十帯地向斜における地層変形機構の研究」という雄大な構想のものであった。甲藤教授らと連名で発表された高知大研究報告所載の一九七四年および一九七五年の論文では、室戸半島東側の室戸層・奈半利川層に見られる小褶曲や砂岩レンズの分布が重なり合うことなく、ある程度規則性を示すことと、砂岩の三軸試験から期待される変形・破壊様式の同一性の両者から、この地域の地層の変形様式の差は一連の褶曲過程の後の断裂運動（衝上断層など）によってもたらされたものとしている。これは、かつて紀州の牟婁（むろ）層群で行なった私のブーディンに関する研究結果とは異なる結論であって、私にとっては深く考えさせられるものであった。

一九七三年に科研費で導入された高圧三軸試験機による研究も軌道にのり始め、これと併せて四万十帯の研究が更に発展し、大きくまとめられてゆくのを注目して見守っていたのであったが、天この人に齢いをかさず、夭折されたこと、まことに痛恨にたえない。

（新潟にて、二月二十日）

高知大学地質学教室同僚から

故三井　忍教授を偲んで

――桂浜の五色石――

東　正　治

私の実験室の片隅には先生と桂浜にご一緒した時に採集してきた想い出の石が残っている。有名な五色石で、サンドバスの砂として使っている私にとっては非常に大事な石である。

先生は地質屋らしくいつもよく調査に出かけておられたのに、私がご一緒できたのは、残念な事に赴任して間もない昭和四十七年四月の桂浜巡検が最初で最後であった。どちらが〝雨男〟だったのか、その日はひどい雨となり、観光気分で出かけた私が雨でがっかりしていたのとは対照的にあのひどい雨の中を先生が一生懸命案内されていた姿は今でもよく覚えている。あの時先生は参加した学生に対して、クリノメーターの使い方やルートマップの書き方などの基本的事項から、専門にしておられた断層や褶曲の問題を実にこまごまとていねいに説明しておられた。特にあのうらやましいばかりの巨体を調査服からはみださんばかりに折り曲げられ、例の煙草をくわえながらの、そしてまた額に幾分しわをよせながらの得意のポーズで露頭を観察しておられた姿が、赴任して間もない私にとっては強烈な印象であった。恩師の「地質は砂と泥の区別ができれば誰でもやれる」という甘い誘いにのって、地質を専攻したものの、最初のころはおもしろさがわからず大分苦労された話を後になって伺った事があったが、地質屋だという誇りと自信に満ちた、この日の迫力ある説明からは、そのような過去はとても想像する事はできなかった。

先生の地質学に対する情熱を物語るエピソードとして、新婚旅行に自分の調査地である伊豆半島を選ばれ、奥様を案内されたという話はあまりにも有名である。生前、先生に直接伺ったところ、ある日調査に熱中しすぎたために帰りの最終バスに乗り遅れ、仕方なく通りがかりの観光バスに乗せてもらったまではよかったが、車内は新婚カップルばかりで非常にバツの悪い思いをし、その時に自分の新婚旅行もここしかないと決心されたという事であった。あの巨体を身の置き場所もないように小さくされている先生の姿を思い浮べ

ると、まことにユーモラスである。

また先生について語る時、忘れることのできないのは学生に対しての厳しい徹底した指導方針であった。その成果は学年末の論文発表会にいつも如実にあらわれ、我々はその見事な地質図におどろくばかりであった。先生が初めて進論を担当された時の小出君（現石油資源開発勤務）の発表で「参考のためにお聞きしますが、一体何日ぐらい歩くとそんな立派なマップが書けるものですか？」と私が教官としてははずかしいような妙な質問をしたのを今でもよく憶えている。小出君についで萩原君、さらに上野君、平賀君へと三井研究室の素晴らしい伝統が生まれつつあった時に先生は急逝されてしまい、まことに残念でならない。先生は手術後の無理なお身体にもかかわらず、奥様にむかわれて学生との連名で地質学会講演の申込みを頼まれたと聞く。その熱意にはまことに頭の下がる思いである。

そういえば、地質学会の高知開催に真っ先に賛成されたのは先生であった。ここで先生に地質学会の成功と、入院の前日まで改組委員として奮闘された懸案の理学部への改組が見事実現した事を報告致します。これからは天国で文理学部ではなく、理学部としての地質教室の発展を見守っていて下さい。私の実験室の五色石は熱のためか当初の美しい色が

少しあせてきました。でもまだまだ使えそうです。ここに慎しんで先生のご冥福を祈り、私の追悼文と致します。

高知大学教授
理学博士

三井　忍氏を悼む

梅村隼夫

それは突然の悲報というべきものでした。手術後の容態のままならぬ状態が持続したとはいえ、主事医の死の断定は恐しい程冷静で、その折私が体全体で覚えた凍るほどの恐怖と死の残酷さは、生涯私の脳裏を去らないでしょう。お見舞の時期を失し、参上した際は意識がなく、重大な病いとの闘いに一言の激励すら出来なかったことへの、文字通りまさに無念な悔いが、羞恥として依然として去らない今、ここで短文ではありますが、三井先生と共に生活し、御迷惑をおかけすることだけに終った五年半余りの短かい生活を振り返り、故人の霊に詫び、報いることとする。

率直な感想として、三井さんの学者としての正統な履歴は、高知のような典型的な地方

大学では珍しい部類に属するということでした。赴任された折、まず、東北大学の学者としての正常な教育・応力に、素直にかつ正確に反応された、完成された研究者であるという印象を強烈に受けました。実質も履歴も半人前以下の教員である私に、ことさらのごとく映ったのは当然のことであったと言えましょう。以来この方、上述の感想・印象は私の体内で持続し、三井さんとの交流・接触では、時々、基本的な見解や判断の違いが生じましたが、私は「三井さんとは本質的に違うものが多すぎるゆえ致し方ない」と淡白に判断、反省したものでした。今、逆に考えつめてみると、見習うべき、学ぶべきことが多いことに驚かされます。

いろいろ思い起こしてみると、三井先生は旗木直参を彷彿させる誇り高き地質学者だったと、いまさらながら痛感されます。三井さんのダイナミックな精力的な野外調査、正攻法的な議論、大上段からの解釈は、関連する部門で他の追随を許さぬものがあったように思います。赴任後は、常磐の第三系の仕事の残務整理をされ、ひき続き四国の四万十帯の研究に従事されたことは周知の通りでしたが、私が幾分関心のある構造発達史、岩石構造の部門でも履歴に合致した発想をされ、私もなるほどとおおいに啓蒙されたものです。御一

緒に担当した四十八年度の進論の折には、数日須崎付近の古生層、四万十帯の御案内をいただき、仏像構造線の形成に関連する断層運動と地層の変形との因果関係や、断層・褶曲の変形状態を観察する際の力点に関すること等、今でも御教示いただいた語が耳から離れないほどです。この進論に際しての指導力の巧みさ、思い切りのよい仕事振りと共に学生への意欲的な激励も忘れえないものです。ともあれ、先生の調査・研究へ取り組まれている真摯な姿に、個性的な豊潤な人格に魅せられて、競走馬のサラブレッド的に調査に励む学生が続出し、先生の好指導の下で三井研の四万十帯への取り組みが進展し、数年のうちにして四万十帯のうち特に室戸半島地域の踏査が完了したわけです。高知大学という場で、自信をもって、力量をもて余されるごとく研究に励まれた三井さんに、私淑する学生が続出したのは当然であったと言えましょう。こうした学生を極めて大切にされ、私的な日常生活まで適切な御忠告をされていたようで、先生の他界を肉親のそれのごとく感じた卒業生、学生も多かったことと思います。とにかく、三井さんは「大学は学問、業績で勝負しなければならない」ことを力説され、筋の通った侍風の生活展開をされていたことは間違いなく、私はこの点でも気風の高潔さが伺えると思っています。

話は変りますが、三井さんの声、説明（話）ぶりは、昭和相撲史に燦然とした栄光を残した大横綱「大鵬」のそれらに極めて良く似ていたことです。ＮＨＫの放送で大鵬が解説するのを耳にする時、私はいつも三井さんとの共通性がどんどん浮かび、おかしい程でした。一度三井さんにその事を申した時、にこにこ笑って「そうですか」と口数少なくおっしゃいましたが、当然、他の方々が以前に指摘しておられたのでしょう。周知のごとく、大鵬は全国から俊英たる多くの弟子を集め、数年のうちで旧い伝統をもつ部屋と肩を並べる相撲部屋を確立し、同時に理事待遇として協会の管理、経営に大いに手腕を発揮しています。一方、研究・業績の伸長度、学生の教育・育成ぶり、体調のお悪いさなか文理改組に際し発揮された卓越した事務能力と、三井さんの真価を並記すると、上述の大鵬との共通性が話ぶりや声だけでないことに改めて目をひらかされます。ところが、その大鵬親方が、三井さんが鬼籍に入られた頃から高血圧に悩み、先般倒れて目下療養中なのです。私は私なりになにか因縁めいたものを感じているのです。巧みな比喩ができませんが、それぞれの立場で共に体力に恵まれていた方々だけに、健康に対する認識に盲点があったことがただただ悔やまれます。常勝者の大鵬の異国風の容姿が私の記憶に永久に残存するごとく、学者として夭折された三井先生のイメージは、私に別の意味でエキゾチックなものとして浮かび続けるでしょう。

本当は、今でも四万十帯の地質構造の話でも伺うことができるようで、逝去されたことが信じられないくらいなのですが……。ともかく、私は三井先生の死去で、人生の瞬時さ、人の世の毀誉褒貶の空白さをいやという程味わうこととなりました。一刻とて、私は三井先生と世のはかなさが結びつくなど想起だにいたしませんでした。最後になりましたが、三井先生、天国から奥様、おじょうちゃん、ぼっちゃんを、いままで以上に見守ってあげてください。御遺族の皆様の御多幸を祈願申し上げるとともに、心より先生の御冥福をお祈りします。合掌。

三井　忍さんの事

波田重熙

「三井先生が亡くなられた」

私には、とてもこんな事は信じられなかった。つい先頃、お元気そうで、堂々とした体

軀の彼と別れたばかりではなかったか。

私は、この悲報を受け取った時の事を忘れはしない。

カナダのハリファックスへ来て一年が過ぎていた。この日本のほぼ裏側に当る、しかも大西洋に飛び出した静かで鄙びた土地では、さすがの日本人にもそう会う事はなかった。だから、深夜、電話がけたたましく鳴って、甲藤先生のお声を聞いた時には、正直言って、慕しいという気持が込み上げてきて、思わずはずんだ声を出した。しかし、この上気した気分は、次の瞬間、冷水に打たれたように萎んでしまった。甲藤先生のお声から、何か徒ならぬ事が起った事がすぐわかった。

あの夜は、上の子供の一番仲の良いクラスメート、クリスティンが我々のアパートに泊りに来ていた。我家で一番よく電話を使うのは子供達なので、受話器は子供部屋に置いてあったのだが、電話の音と、緊張した私の大声に、クリスティンはビックリして、半身をベッドから起こしてキョトンとしていた。

その後暫く、子供達がスクールごっこ等をして遊んでいる時、クリスティンは、電話の応対で、「ハッ」、「ハッ」とやっていたと妻から聞いた。私のこの夜の真似である。私

には、その時、この言葉しか出て来なかったのだ。そして、「何卒宜しくお願い致します」と最後にお伝えしたと思う。「死」という知らせに対して遠く離れていてただただ皆様にお縋りする事しか出来なかったのである。

高知におられて、ずっと三井先生の最後まで、御家族の方と共に献身された方々の、悲しみや言い様のない憤りの大きさは想像してあまりあるが、外国にいて、突然の知らせで、自分が理解していたのとは全く違う情況へ追いやられた場合のショックの大きさも思い知らされた。

彼が高知大学へやってくる少し前（一九七〇年）の八月、私は彼に愛媛県の私のフィールドへ来てもらった事があった。私は当時、黒瀬川構造帯の形成に関する研究をやっていて、彼の高封圧下における岩石物性の仕事に注目していた。だから、彼が東北大学出身だったのを幸いに、甲藤先生を通して、構造帯の三滝火成岩類の圧縮試験を依頼した事に始まって実現した巡検であった。

フィールドへと出発の日、台風の余波で、ものすごい雨が降っていたが、手に入れたばかりの慣れない中古車で、出発を強行したのを覚えている。彼が夕闇迫る中、ドシャブリ

の雨で殆んど何も見えない前方を、大きな体を乗り出して、喰い入るように注視してくださっていた姿が、昨日の事のように思い出されてくる。フィールドで、太っておられた為か、体に比例するように大量で、大粒の汗をかいておられたのも印象的だった。彼の研究対象としているのは比較的若い時代の地層であったから、そういう眼で、構造帯や、その囲りの岩石に対しても細かい観察をして、多くの疑問を投げかけて下さったのは実に有がたかった。

このフィールドへは、その後、高知大学へ来られてからもう一度、卒論の学生三人（うち女性二人）と共に出かけた事があった。「卒論開始コンパ」と称して、宿のフトンの囲りへ、ビール瓶や徳利をずらりと並べてゆきながら、夜遅くまで飲んで語った事も思い出す。飲むと、彼の弁論は益々迫力を増したのも御承知の通りである。

私は今も彼の元気な姿しか知らない。

奥様の悲嘆は察するにあまりある。この悲しい出来事に何一つのお力添えも出来なかった私を深くお詫びすると共に、この拙文をもって、謹んで故人の御冥福をお祈り申し上げる次第である。

三井　忍氏の想い出

満　塩　博　美

三井忍氏と初めて出合ったのは、昭和四十五年十月二日から四日にわたって開催された地質学会の第七十七年大会で、静岡大学の会場であった。彼は昭和四十六年四月から高知大学に赴任が決まっていたので、ゆっくり話そうと思っていたが、学会のシンポジウムの「岩石・地層変形の現象と機構」で「常磐炭田における断裂系」という題目で講演するので時間がないということで話せずじまいであった。……

それから約半年経て、四月初めやっと着任して再び会えたわけであるが、彼の研究室は私のもといた部屋ということになり、何だか申し訳ない気がした。「二号館に離れていてあまり良くないよ」と彼に言ったけれども、「気にしないことにしています」と笑っていたものだった。また、彼は着任のあいさつと言って土産物もくれて、こちらは恐縮したものだった。……

このように、三井氏は折目正しく、筋をとうして、私自身蔭日向から多いに助けられた

ものであった。彼は学生に対してもよくめんどうをみていたし、彼の研究室にはいつも学生がいて仕事をしていたものであった。

また、私自身の教授昇任のさいの業績審査や人事委員会で熱弁をふるっていただいたそうで、昭和五十一年の十一月遅くだったか、夜遅く電話がかかって連絡してくれたものであった。

一番最後となったのは、十二月になって教室会議の終了後に書類を届けに行った時のことであった。夜暗くなっていて、隔離病棟の二階に面会謝絶の札がかかっていたが、困って看護婦に事情を話すと、ほんの二、三分ならよいということで、立会ってもらい病室に入った。喉がかわいて、口唇がかわいてきっそうであった。改組などの必要書類の書換えのことであったが、「教室にまかせます」と言い、「今が大事な時なので安静にしています」と言った……。それからどれくらいの日がたっただろうか、教授会の日の午後全員かけつけると、本館のベッドの上で苦しそうであった。正直なところ、私は全く意外であった。どうしてこんなことになったのか？　思うに、B教室のO教授も入院されていたが、元気に退院されたのに……。私どもはそれで気軽に考えていてとんでもないことをしてしまったようだ。あんなに頑丈な身体をしていてかくもあっけないとは！

残された子供達……。私も肉親が早く逝き、自分の子供達をみていると絶句せざるを得ない。得がたい同僚を失い、あまりにも混乱していてもう少し時間が必要である。

……ゆく冬や　巨木の朽ちて　草乱る……

……人の世の生死を越えし我なるに　などてか涙の溢るらむか……

三井　忍君を偲んで

鈴木　堯士

去る昭和五十一年十二月十六日、三井忍君の急死の報に接したのは、丁度大阪市立大学での集中講義の最終日であった。「そんなはずはない」、「間違いだろう」と動揺している自分にいい聞かせながら、何とか冷静さを保とうと懸命の努力をしたことを思い出す。

昭和四十六年四月に高知大学に赴任され、同僚として五年半おつき合いさせていただいた。三井君は大柄な体格に似合わず、少年期から一躍大人になったという純粋な一面を持

っておられた反面、研究・教育に対しては熱血漢ともいえる情熱を傾注され、ファイトのかたまりという表現がぴったりする一面をもっておられた。

振り返ってみると、専門が違うという点もあって、五年半という期間、研究面で協力し合うことができなかったことを今更ながら残念に思っている。野外調査も行動を共にしたのは、赴任された当初学生の野外地質巡検で、変成岩地域を歩いたことが一、二度あるだけである。しかし、夜の部でのお付き合いは数え上げると切りがない程である。コンパの帰路、学生ともども拙宅へ来られ、例によっての快気炎で、「もっと盃をあけて」とあの大きな手のひらで背中をたたかれ、負けじとばかりにガブガブやり、翌日気付いた時には二日酔ということも二、三度あった。

岩石三軸圧縮実験装置を何とか購入したいという相談を受けたのも、赴任されてまもなくの頃であった。三井君としては、高知大学の機械概算要求か科研費の一般研究A（物理）か迷っておられた様子で、私としては相談を受けたもののどちらが早道か自信はなかったが、科研費一本にしぼってはということをサジェストした。もちろん、三井君の実力が認められての科研費獲得ではあったが、購入決定通知を息せき切って私の研究室に持ってこられ、体中でその喜びを示された様子を今でもはっきりと覚えている。

それからの彼の研究は野外調査と実験を両立させるべく、四万十帯の構造地質学的検討がはじまった。教室内でたびたび彼の研究の一端を披露され、当初それに対し素人ながら論理にいささか飛躍があるということでかなり手厳しいことをいった記憶もある。しかし、何しろ野外でのデータがしっかりしていて、これに実験的な裏付けを加えていくという新しい方法論に対して、私自身専門外ではあるが、彼の四万十帯に関する一連の仕事は私なりに高く評価していたつもりであり、これからますます充実した研究が公表されるという印象が強かっただけに、彼の急逝はかえすがえすも残念である。

三井君の仕事は私利私欲を捨て、純粋な気持で自然に立ち向かい、本当に学問を追求していこうという誠実純真な学者的センスを持っておられた。これから先が楽しみな人であっただけに、掛け替えのない研究者を忽然として失ったということは、当教室としてまことに痛惜に堪えないところであります。

業半ばにして世を去られ、残された御遺族の悲しみと淋しさは察するに余りあるものがあります。善枝ちゃん、巌君も立派な父親の御遺志を継承され、すこやかに成長されるこ

とを心から祈り上げております。

三井君、さようなら

甲藤次郎

弔辞で私の気持ちを既に申し上げたので、ここにはプライベイトな立場から書かせて頂きます。

大学では酒はつきものだが、酒宴後お互いに相当酩酊した場合でも、君は必ず私を自宅まで送り届けることを忘れなかった。まだ若かったので、恐らく二次会や三次会の誘惑を振りきることもあったであろうに。

大学着任後年数もまだ浅かったので、私との共同研究の例は数えるほどしかないが、君はいつも私の名をトップにするのを固持して譲らなかった。君の名をトップにしたい場合でも、「先生は私達の防波堤になって下さい」と言ってきかなかった。

君はそういう人だった。

また、五十二年四月の高知での日本地質学会全国大会で、私に特別講演をやる決心をつけさせたのも君の一言が大きかった。

特別講演をやるかどうかが教室会議の話題になった時、何となく避けた方がよいという発言の多かったなかに、「むしろ、甲藤先生は率先してやるべきだ」と、強く発言したのは君だった。

当番大学の慣例とされている同講演を断わるのは前例のないことでもないが、暗に四国で初めてというううたい文句で引き受けている同学会で、理由もなく慣例を避けるのは責任者として心苦しいことである。他に候補者もあがっていなかったことだし、結果的には学会人として私はこの光栄ある機会を得ることとなった。

まだ思い出せば数えきれないが、三井君、本当にいろいろ御世話になった。有難う。

これに比べて、君に報いる機会の少なかったのは残念である。

ただ先に述べた特別講演の演題は、「四国の地質の最近の進歩」についてであったが、そのテーマとなった二十万分之一「四国表層地質図」の作成にあたり、はじめある理由で同研究に参加していなかった君が、その後の私との共同研究を通して、同研究の調査並び

に編集者の一員として、君の名が本図幅に永久に残ることになったのは、何よりの鼻(はなむけ)となった。

私がライフ　ワークとする四万十帯の研究に、よりよき協力者の君を失ったのは、私にとっても誠に残念なことであるが、これもせんないことであろう。

君は豪放磊落な反面、学者らしい細かい神経の持ち主であったが、私達をめぐる社会―教室や大学或いは政治―に対しても、他の顔色をうかがうことのない自分の考えを堅持し、常に鋭い批判を絶やさなかった。酒を伴っての談たまたま興に入るや、君の核心をついた「ふざけるなってんだ」の言葉が今更のように懐しく思い出されてならない。

私の生涯で忘れ得ぬ人となった三井君、さようなら……。

東北大学大学院時代の同級生及び後輩から

三井　忍君を思う

松　丸　国　照

三井君は、東北大学時代は常磐炭田地域の第三紀層の積成機構および同地域に発達する断裂系の形成機構に関する構造地質学に多くの貢献をされた。高知大学時代は、高知県下の四万十地向斜における地層変形機構を解明するために、野外調査および岩石物性試験の両面から研究に従事し、成果の一端は甲藤次郎教授らとともに、高知大学学術研究報告および日本地質学会での講演等に発表され、今後の活躍が期待されていた。殊に、三井忍君は四万十帯（南帯）の地質構造は造構運動により規制された、という見解を明らかにし、構造規制の場の復元等、そのメカニズムを研究していた。

私は、三井君とは伊豆半島、常磐地域と、フィールドを一緒に汗をともにして歩きまわった思い出が一番なつかしい。今にして思えば、四万十帯のフィールドに来ないかと誘われた時、一緒に歩くチャンスを作るべきだったと悔んでいる。現在、私も東京都下の小仏

層、小菅層付近までの調査に出掛けることが多いので、比較できたろうにと思うと……。

彼は仕事の鬼になって、夢中に山野を歩きまわることが多く、いつも、「歩け歩け」をモットーにしていたように思う。そのデータが彼の研究の基礎を作り、歩く人の少なくなった現在の層位学的研究の分野を受け継ぐに足る人材ではなかったかと思うと残念なことである。

彼には素晴らしい奥さんと二人のお子さんに囲まれた際、柔和な顔をさらに広げてめがねをかけなおす時、至福の至りであった。ドクター後、南仙台の竹林を前にした家に遊びに行ったことがあるが、善枝ちゃんを膝の上に乗せて、おてんばで困るなどと言って目を細めたり、寝ると頭をタンスにぶつけるといけないと言って、座ブトンをタンスの周りに並べるといった心配りであった。そうした彼との公私にわたる付き合いで、深酒を酌み交し、議論しあったり、喧嘩したりし、激励しあったり、いろいろなことがあったけれど、もう金輪際それも可能ではないとは何と寂しい事であろう。

仕事に追われている私が、他の用事で八重州口の人ごみを歩いている時、「おい！三井君」と今にも声をかけたくなる時がある。他人の空似とは後になって気付くのではあるが、今も生きていて欲しかった人物だけにそれも空しいと言うべきなのであろう。彼と妊枝子夫人とは前々からの懐かしい思い出が走馬燈のように思い出されるが、妊枝子夫人はいうまでもあるまい。何と悲しいことであろうか。

末文ながら、心を強くしてお子様方二人を大成なさることを、そして、お力添えをさせていただく者の一人であることを記して思い出の記にします。

（埼玉大学教育学部地学教室）

三井　忍さんの思い出

速　水　倶　子

東北大学理学部地質学古生物学教室の大学院生研究室。毎日午前八時過ぎ、大学院生のほぼ半数と時々顔を出す若手スタッフのお茶の時間が始まる。三井さんは必ず朝八時前には研究室へ到着なさって御専門の構造地質の文献をお読みになっていたり、地図を広げたり、とにかく仕事をはじめていらっしゃった。私は朝早いのは苦手で、八時過ぎに研究室

へ着くのがやっとのこと。「お茶がはいりましたよ」というまで一心不乱に仕事を続けていらっしゃる。研究室のほぼ中央にある大きなテーブルを囲んで、お茶を飲みながら五、六人、時には十人くらいもおしゃべりしているのは壮観であった。大きな三井さんが何となく中心になった感じで、学問的なことから、野球、テニス、映画、その他諸々みんなで語り合う。そんな時、三井さんはニコニコと話を聞いていらっしゃって、時々ズバリとワサビの利いたことを発言なさる。今思っても楽しい一刻であった。

また私が論文発表用のビラなど書いていると、机が隣り合っていたので、チラリとながめて「それじゃ読みにくいよ」とか、「そこはこう書いた方が…」とか色々教えて下さった。

私とは昭和四十四年の一年間しか同じ研究室にはならなかったが、三井さんが高知大に就職なさり、私も偶々愛媛大に来ることになってからは「同じ四国にいるんだから困ったことがあったら連絡して」とおっしゃって下さった。それに甘えて学生の卒論で室戸付近の化石調査に行ったときには案内をお願いし、宿の手配からすべてお世話になった。学生は大の三井ファンとなり、事ある毎に素適な先生ですね、ということになる。

一見豪放磊落に見えて神経質なところもあった三井さん。学部学生の卒論指導はもとより、後輩のめんどう見もよかった三井さん。そんな三井さんがおなくなりになったという甲藤先生からの第一報がはいったときには、文字通り非常なショックであった。あまりにも早すぎるお別れである。まだまだ残したことも沢山おありだろうし、御遺族の御悲嘆もいかばかりか。

三井さんの御冥福を祈り筆を置く。

（愛媛大学教育学部）

三井先生の思い出

藤井文雄

三井先生は、地質学教室のある棟と違う棟に研究室を持っておられ、そのためにそれほど密にお話しする機会がありませんでしたが、それでも二つほど懐しい思い出があります。一つは、三井先生に連れられて初めて佐川に巡検で行った時です。私は今もそうですが、あの時は今以上に地質の「地」も知らなかったものですから、全くチンプンカンプンで、クリノメーターについている簡単な測量器をのぞいて、「何や倍率が変らんや」と言った時、先生は大きな声でお笑いになりました。失敗談はこれだけでなく、先生が砂岩を示されて、私に「これは砂です」と言われたのですが、私は砂というものは常識的にサラサラとした粒子であると思っていましたので、「これが砂ですか、どう見ても石にしか見えません」と言った時、先生はこの時には笑われず、少しあわてて真剣な顔をなさって、今度はフルネームで「砂岩」と言われたことを覚えています。

二つめは、福島への長期巡検の思い出です。福島は先生のフィールドで、先生は熱心に色々と教えて下さいましたが、これも馬耳東風でしたが、宿で夕食が終ってからも食事の時の話がつきず、夜遅くまで先生を囲んで、先生が人生論や女性論などをお話し下さったことも懐しい思い出です。

先生は食堂などでお会いしたら、いつもニッコリ笑って下さいましたし、三井研の学生達と一緒に食事をなさっている姿を見て、先生は本当に学生が好きでいらっしゃると思いました。又、学生が先生の学問のことをうんぬんするのは不遜なことですが、私達は先生が何か大きなことをなされると噂していたのですが、その先生が余りにもお若くして亡くなられたとは残念です。

三井先生追悼文

尼崎敏行

三井先生が逝去されてはや数ケ月、今でも思い出すたびにとても信じられない気持ちで

いっぱいです。

巡検に、進論に、授業にいろいろお世話になっていた先生が、ついさっきまで元気に教壇に立って、時々冗談などをとばされておられた先生が、急に、どうして……まさかと思いました。思えば巡検の時、暑いさ中、先生をまじえてスイカを食べた事、進論中間発表で、先生にあれこれと指摘された事、進論の終わった今、あの時もっといろいろ聞いておけばよかったと悔やまれてなりません。しかし、いくら悲しんでも、先生はもう帰らざる人となってしまいました。

今の僕らにとって一番大切な事は、御遺族の方々のいっそうの御多幸を祈ると共に、いつまでも先生の事を忘れることなく、先生の教えを生かし、よりいっそう勉学に励むことではないかと思い、改めて心に深く刻むしだいです。

三井先生の思い出

中川仁志

三井先生の思い出は、不思議にその時々の姿になります。

初めて、土曜巡検で佐川へ行った時の事です。大きな三井先生の後姿が強く印象に残っています。作業衣に身を固めた三井先生。その大きな背中に、いかにもこじんまりと小さくのったリュックサック。斜めに突き出たハンマー。頭の上の小さな登山帽。そんな三井先生が、スタスタと佐川の田んぼの農道を、大股で歩かれた。その後姿が今でも強く目に残っています。ちょうど五月で、イチゴの匂が、道々に漂っていました。巡検の帰り道で、イチゴのにおいに誘われて、誰かがイチゴを貰いに行くことになりました。結局、三井先生が交渉に行かれましたが、決裂しました。

卒論発表の時です。三井先生は大きな体がイスに収まらなくて、足を組んで斜めに座られ、肘を付かれて、エコーをスパスパスパと吸われている姿が目に残っています。

二回の長期巡検で、常磐湯本の宿舎での一夜を、人生論、恋愛論に花を咲かせた思い出。真夏の炎天下、日焼けして、袖をまくって、濶歩され、フィールドを説明してくださった三井先生。大きな体を揺すっての講義。油に汚れた白衣を着て構内を歩かれていた三井先生。

あれ程元気だった三井先生が、突然入院され、そのまま帰らぬ人となられました。先生が入院された日、偶然、廊下で先生に擦れ違いました。その時は、病気だということも、入院するということも知りませんでした。ただ先生が、大きな体を小さくされ、恥ずかしそうに上目づかいにされていました。それでいつもの先生にしては変だなと感じました。それがあんな結果になろうとは夢にも思いませんでした。そして、それが先生の最後のお元気な姿となりました。

三井先生との最後の山は、進論で白木谷に入った時でした。小さな雑貨屋で、休憩してビールを飲みました。その時先生は、バイクがあるからと言って、ビールを飲まれませんでした。もうすでに、その頃から健康がすぐれなかったと後で知りました。

三井先生の思い出は、いつもある風景の中にあります。だからその風景とともに、いつまでも心に残ってゆくと思います。

三井先生へ

植松洋子

三井先生を追悼することは、取りも直さず先生の思い出を辿ることのように思えますので、思いつくままに書いてゆきたいと思います。

初めてお会いしたのは、入学式の次の日、地学のオリエンテーションの日でした。補導教官を決めるため、私たち学生はくじをひきました。先生曰く「おれはあんたがくるんじゃないかと思ってたんだ」の言葉どおり、ただ一人女の子の私は、三井先生の補導生になりました。あれから二年九カ月、今思えば先生、親切すぎる先生でした。部屋へ伺えばいつでもいやな顔ひとつせずにつまらぬ相談に乗ってくださいました。先生の研究室が在ることが、相談する人のいない私にとってどんなに大きい心の支えであったか、今、痛感しています。

恒例の三井研究室コンパは、司牡丹とビールでしたね。飲めば恋愛論を話される先生。その恋愛論の絶えて純粋なるかな！そして、先生の頑固なこと。「いや、女なんてものは

ね、家にいるのがいちばんいいんだよ」。そうおっしゃる先生が最も女性に対してやさしく、時にきびしい理解者であったと思うのですが……。そして「来るものは拒まず」の三井研コンパが、学生の間の大きな潤滑油であり、とても楽しいものであったことを付け加えたいと思います。

講義中の先生。あまりおもしろくもない冗談を時々言われるのですが、そのあと先生が御自分で言われた冗談に大声で「わはははっ」と笑われるのがおかしくて、私たちも一緒に笑い出してしまったことがしばしばでした。

先生、山を歩かれるのお好きだったですね。山道を力強いダイナミックな足取りで歩かれる先生はステキです。そして露頭を見て、エコーをすっぱと吸って「こりゃあなた、断層ですよ！」とおっしゃった先生の自信ありげな顔。

先生のお宅に伺うこと二回。「つまらん親の見栄ですよ」とおっしゃりつつ、りっぱな善枝ちゃんのためのひな人形、嚴君のための五月人形を見せてくださった先生。でも、そのときのお顔ときたらほんとうに嬉しそう、照れくさそうなのです。先生は、子煩悩でした。「うちの善枝はマセてきた！」「うちのぼうずは、おれが一週間山に行って帰ってだ

っこすると泣き出すもんな」。先生が私たちに話されるその言葉の中にどれだけ家族の方々に対する愛情が含まれていたことでしょう。

病院にお見舞に伺ったとき、「なあに、食って寝てりゃあいいんだ。たいくつな商売だよ！」と笑う一方、弱気になられていたようで「しばらくゆっくり休みますよ」と沈んだ声で言われ、日頃とてもお元気な先生だけに、よけいに苦しかったのでしょう。そして病室から失礼するときに先生が、にっこりして、「また来てください」とおっしゃってくださった言葉が最後の言葉になってしまいました。

先生の逝かれた朝は、今にも雨の降り出しそうな曇天でした。

私が先生にお会いして、先生が逝ってしまわれるまで長いようで短い時間でした。でも先生の人柄に触れることができたその期間は私にとって大切な期間です。まだ、研究室に居ると、先生が「やあ、来てたの」と言って入って来られそうな気がします。ただ、今は、先生が、その暖かいおおらかな優しい人生を高知で送られ、私に下さった数多くの思い出を、しっかりと胸に刻んでおきたいと思います。

三井　忍先生の思い出

死去を悼んで

大南雅宏

先生が亡くなられたなんて、今でも信じられないくらいです。私はよくキャンパスやエレベーターの出入口などで先生に突然出会ったのですが、そんな時、先生はいつも〝ヨーッ〟と笑顔で答えてくれました。あの〝ヨーッ〟という単純な言葉には、何か不思議な親近感と愛情があふれていて、沈んでいた自分を何度か励ましてくれました。今でも思い出して不思議でたまりません。たぶん学生をあくまで愛され、非常に寛容であられた先生の人柄がそのままあの単純な〝ヨーッ〟という言葉の中に含まれていたのだと思います。また私はたびたび先生の研究室にお邪魔したのですが、研究室を失礼する時には必ず何か奇妙な満足感を得ていたものでした。それは専門的な知識であったり、先生の経験を通しての人生訓や社会観であったりしました。その一つ一つが私の人格形成にどんなにか貢献したことでしょう。

先生は非常に研究熱心な方であられ、また物事に対して、特に学生に対しては驚くべきほどの寛大さをもって接せられました。あれだけの物事に対する寛大さは生来のものだけではなく、先生の人生を通じての数知れない経験による産物だと思います。どんなに忙しい時でも、研究室にお邪魔すると必ず相手をしてくれました。今でもエレベーターのドアが開くと、先生の巨体が突然私の目の前に立ちはだかり、〝ヨーッ〟と微笑んでくれそうでなりません。また研究室のドアをノックすると、整然とした単調な〝ハイーッ〟という声で答えてくれそうでなりません。正に先生は学者らしい良心をもち、清楚な生活を通した方でした。

私が先生を初めて知ったのは、昭和五十年四月十一日(金)の専攻別オリエンテーションの時でした。濃紺の背広を着た体格のよい先生が、机にもたれかかるような姿勢で自己紹介なさったのを覚えております。確か、「私は物理の方に席がありますが、物理とは全く関係ないのでありまして、地質の教官です」というようなことをお話しなされました。今、昭和五十年度の学生便覧を見ると、先生のお名前の前に○印を付け、そばに、東北大・構造地質学・断層と自分で書いているのが懐かしく思われます。先生とは縁があったのか、

幸運にもくじで私は先生の補導生となりました。話が前後しますが、私は自己紹介の時、「地震に興味がある」と申しますと、教室主任の甲藤先生が、「三井先生は地震について詳しいから、いろいろとお聞きするとよい」とおっしゃられましたが、幸運にも自己紹介の後の補導教官を決めるくじ引きで、三井先生が私の補導教官となりました。オリエンテーションが終り、もう一人の補導生である内田博美君と新館の四階にある先生の研究室へ連れていかれました。その時、私も内田君も初めて入る大学教官室の厳粛さに圧倒されて、あまり多くをしゃべらなかったようです。三井先生は、「今年は女子学生がおらんが、どういうわけか女子学生がおると必ずといってよいほどくじで僕の補導生となるよ」とおっしゃられ、笑われたことを記憶しております。ここで先生独特の〝笑い〟について記したいのですが、先生は自分のおっしゃった事がさほど面白くない時にも、声高らかに笑われました。私達も先生の研究室で、そのような高らかな笑いに引き込まれて、いつしか笑ってしまったものでした。これは三井補導生以外の学生には少し理解され難く、講義中に先生のおっしゃられたさほど面白くもない事に先生自ら声高らかに笑われた時などは、みんなやや奇妙な様子でキョトンとしておったようです。それがまたおかしくて、吹き出しそ

うになったことがしょっちゅうありました。

三井研は比較的よくコンパをやりましたが、その一つ一つが先生の亡くなられた今となっては思い出深きものとなりました。先生はいつかコンパの席で、三井研の発足を話されました。先生が高知大学に来られた当時は、補導生も二、三人で小規模なものだったようですが、次第に卒論生・補導生も多くなり、今日に至ったのでした。コンパの席で、先生は私達学生に非常に有益な先生の経験を通じての御教訓をお与えになりました。それらが、青春時代のまん中に居る私達にどんなにか身にしみて有難かったかしれません。先生はほんとうに学生を愛されました。それだからこそ、コンパを開いて学生に大いに語ろうとされたのでありました。思えば昨年の七月十六日（金）の三井研帰省コンパが先生との最後のコンパだったのです。それからも何度かコンパを企画したのですが、先生や学生の都合などでとうとうできませんでした。

昨年の十一月二十九日（月）の第一時限目の〝岩石物性学Ⅱ〟が先生の最後の講義となるとは、今だにどうしても信じられないのです。その講義の途中、先生は、「少し気分が悪いからイスに座らせてもらう」とおっしゃいましたが、先生のお身体が全く健康だと思

っていた私達は少し奇妙に感ずる次第でした。先生は相当苦しかったのでしょう。外見からは全く健康そうだったのに。今だに、あんなに体格がよく健康そうな三井先生が急死されたなんて信じられません。先生の最後の講義となった「Porosity の影響」の最後に〝tectonics が地域差に大きく影響する〟と先生の講義をノートして、それを赤ペンで囲んでいるのを見ると悲しくてなりません。これが正に先生の『岩石物性学』の決定的な最後のノートとなるとは夢にも思っていなかったのです。今、改めて先生の講義をノートした『岩石物性学』を開いてみると、十一月二十九日の日付の付いたページに続くページは全くの空白となっております。これに続かねばならない重要な事柄が沢山あるはずなのに。これがこのノートの運命だったのかなあと溜息をつくばかりです。

先生は、最後となった講義の中で、「建設や土木に関する官公庁は、もっと地質屋を採用すべきだ。地質屋が少ないため、災害に弱いのだ。土木屋や建築屋ばかりでは、台風や地震などの天災に対しては無力なんだ」といったような主旨のことをおっしゃり、「そうすれば、地質を出た学生の就職も緩和されるんですよ」と、例によって声高らかに笑われたことが印象的でした。そして講義が終わって教室を出られるとき、「〝大南〟、忘年会

を計画しておいてくれよ」といつもの調子で言われて階段を降りて行かれました。その日、昼休みにもう一度先生にキャンパスでお会いしたのですが、それが先生との大学での最後となったのです。

その日から二日目の十二月一日（水）の朝、先生から卒論指導を受けている四回生の水野さんから、「三井先生が今朝、入院された」ということを聞き、それまで全く先生の容体を知らなかった私は、何のことだかサッパリわからず、ただビックリしただけでした。長びきそうだということは聞いていたのですが、入院されて約二週間後の十二月十六日（木）の早朝にお亡くなりになるなんて、ただただ驚くばかりでした。先生の病状に対しては全く私はばかでした。二、三カ月もすればまた笑顔を見せてくれるだろうと安易なことばかり考えていた自分をくやしくてなりません。一度、十二月十一日（土）の午前中に別館の方へ面会に伺ったのですが、玄関に面会は午後一時から八時までだと書いてあったので、無理して二階に昇ればよかったものを、また出直そうと思いそのまま帰ってきたのですが、あの時、コッソリ面会すればよかったのにと残念に思うばかりです。次の日の十二日の日曜日にお見舞いに行けばよかったものを、午後からグランドでソフトボールをし、夕

方からささやかなコンパなどに出席したため、とうとうキャンパスで昼休みにお目にかかったのを最後に、先生とはそれ以後お話しすることができませんでした。今となっては、バカだった自分を責めるしかすべはありません。その日の午後から先生の容体が悪化し、夜から次の日の早朝までかかって手術したことを、十三日（月）の四時限目の『岩石学I』の講義前に梅村先生から聞かされ、手術経過がよくないことを知り、講義終了後すぐ病院にかけつけたのですが、その時はすでに面会謝絶になっており、先生にお会いすることができませんでした。翌日、病院に行ったときも同じような状態が続いていたようで、やはり面会謝絶でした。帰る途中、「もしかして、先生はこのまま息をひきとられるのではないだろうか」という思いが起こり、恐ろしさのあまり、全身から血の気がひくのを感じました。次の日の朝方、先生に関する奇妙な夢を見ました。先生が回復されたとか、亡くなられたとかいう奇妙な夢でした。その日、十五日の午後四時頃、甲藤先生から、先生が危篤状態だということを知らされ、地質学教室一同病院にかけつけたのですが、とうとう先生は十六日（木）の早朝、息をひきとられました。先生の病室の前で、先生の様子をうかがっていた時ほど、現代医学の生命の死に対する無力さを痛感したことは、かつてありませんでした。ただ何でもいいから一刻も早くこのような居ても立ってもいられない状態から逃れたいという一心でした。かつて、あのような恐怖にも似た緊迫感を覚えたことはありませんでした。

お棺に納められた先生のお顔には、尊厳さと安らかさが満ちあふれていて、正にこれこそ神の顔だと愕然として、脳裏にそのときの先生のお顔が焼き付き、一生忘れることがないと思います。

入学して間もない頃、卒論指導のため室戸方面に行かれている先生を追って、昨年卒業された佐藤浩一さんと内田君とで出かけたこと、新歓のソフトボール大会やコンパ、須崎方面への地質学巡検、その他沢山のわずか二年間足らずの出来事が、先生との貴重な思い出となりました。今はただ、先生の御冥福をお祈りし、数々の楽しく有意義な思い出を私達に残してくれたことを感謝するばかりです。そして、先生の学問に対する非常な研究熱心さと、物事に対する、特に学生に対する驚くべき寛大さは一生私達の心から消えることはないと思います。人間には二度の死が予定されていると言われます。一度目の死は身体から魂が離れることであり、これはいかなる人間も避けることはできませんが、二度目の

死は、人生を誠実に良心をもって生きた者のみが避けることができます。それは肉体の死の後も、他の人の心の中に生きつづけることです。三井先生には、二度目の死はなかったようです。

三井先生が私達の心の中に残してくださった〝熱心さ〟と〝寛大さ〟と〝三井スマイル〟を少しでも自分のものとするよう努めることが、先生の教え子としての我々の任務のように感じます。

いつか機会あれば、子煩悩であられた先生が御寵愛なされた〝善枝ちゃん〟と〝巌君〟に、大そう立派だった先生のことをお聞かせ致したく思います。

最後に、今このような〝三井先生の思い出〟を述べるようになったことは、私達にとって非常な不幸だと思います。

高知大学地質学教室卒業生から

追悼文

上山容枝
（旧姓　瓜生田）

「先生御急逝」の報を受け取ったのは、小雨の降る暖かい冬の日でした。庭に出ると、早足で雲が西からやって来、高みに鳥が一羽翼を拡げ円を描くのが見えました。自然は昨日と変りないのに、人間の世界では変転は、予期せぬ時にやって来るものです。後で、それが運命であったのだと思えばそれまでかもしれませんが、大事な人を失ってしまったのだという無力感は、拭い去る事ができません。私たち補導生は、先生に一方ならぬ御恩を受けたまま、何の恩返しもする事ができませんでした。私などは、御心配と御迷惑のかけ通しでした。それが、とても心残りです。

小雨の中で、じっと目を閉じていると、塩辛い涙と楽しかった思い出が、次々に浮かび上がってきます。私の結婚の時には、大へん喜んで下さり、いただいた祝いの御電話での

明るい御声……卒業式の時の喜びの赤い御顔……校内を行かれる時のリズミカルな特徴ある歩き方……講義中の真剣なまなざし……御家庭での照れた笑い顔……。

先生は、私たちにとっては本当に良き先輩であり、指導者でした。進級論文や卒業論文では、手厚く御指導下さり、また、学習会なども意欲的に開いて下さいました。恋愛や一身上の相談にも、真剣に助言・援助をして下さったり、御家庭に招いて下さったり、みんなでレジャーを楽しむ機会を作ったりもして下さいました。研究室には、いつも誰か学生の姿が見え、そこは私たちにとっては、いわば憩いの場所でした。研究の邪魔になる事も多々あった事だろうと思いますが、先生はいつも快く迎えて下さいました。先生の度量の大きさに、私たちは安らぎを覚え、一人暮しの生活のどこかで助けられていたのだと思います。

ふり返れば思い出は尽きませんが、いつかは私たちも明日に向かって歩き出さねばなりません。先生が研究に勤しまれた地質学を通して生まれた絆を、しっかりと握りしめて前向きに生きてゆくことが、先生の恩に報いる事を信じて努力してゆきたいと思います。

先生、どうぞ安らかに御眠り下さい。

（和歌山県有田郡金屋町中の二三四）

三井　忍先生を悼む

伊熊　俊幸

一九七六年十二月十六日。三井先生御逝去の悲報を電話で受けた。「まさか」と思って疑ってみたが本当であった。先生の元気の良いフィールド姿が頭から離れないので、今だに信じられない気持ちである。三井先生との出会いは、私が高知大学の三回生になった四月であった。それ以来、進級論文、卒業論文、専攻科論文を通していろいろとお世話になった。私の専攻分野が構造地質学であることも重なって、特に小断層解析について野外ならびに室内で御指導いただいた。

先生は非常に議論好きであった。二年程前、構造地質研究会の席上で、私が秩父累帯の断層系の話をしたところ、それに対してつっこんだ質問をされ、かなりの時間質疑応答したことがあった。私の考えを理解していただくのに時間を要したが、納得してもらった時点で「自分もそのように考えるのでもっと深く追及してはどうか」と激励をいただいた。また先生を通じて知り合った構造地質関係の研究者も多い。

講義の面では、私の在学中は「構造地質学II」を担当されており、ビリングス（BILLINGS）のテキストを中心とした話はいつも整然としていた。最近では「岩石物性学」を開講されていたと聞く。フィールドのデータと、岩石の高圧三軸試験の実験データをベースにした「岩石物性」の話を聞くことができなくなってしまった。

先生の研究室は他の研究室に類をみないユニークなところがあり、学生のまとまりもよく種々の面にわたって学生との交流は深かった。生活面ではよき父親として、家庭を非常に大切にされておられた。このことは後輩の小出君にいつも聞いていたし、勝負の川の宿舎時代からも推察できた。

今春、地質学会総会が高知大学で開催される。その折に構造地質研究会の夜間小集会を先生と一緒に準備することを相談していた矢先であったが、残念なことになってしまった。その他にもフィールドで討論していただきたかった事など思い出せば限りがない。

最後に三井忍先生の御冥福を心からお祈り申し上げる。

（大阪市立大学理学部大学院学生）

恩師三井先生を偲ぶ

小出和男

先生が他界されてから早くも三ケ月になろうとしていますが、今だに先生の在りし日の姿がまざまざと目に浮かんでまいります。先生が高知大学に着任されたのは、私達が入学した昭和四十六年で、着任されてまもなくの御挨拶に、教官と学生という立場は違うけれども同期の高知大学「入学」であるから宜しくというような内容のことを述べられたことが、今も強烈な印象として胸に残っています。たまたま補導教官―補導生というシステムがあって、その御蔭で先生がもっと身近な存在となりました。しかし、私自身は一回生の時と二回生の前半くらいまでは「三井研究室ゼミ」の時以外は、先生とあまり顔を合わせるということもありませんでした。それが、どういう動機なのか今だにはっきりわかりませんが、二回生の後半くらいから以降、卒業、そして離高するまで、調査のためフィールドへ行っている日以外は、ほとんど毎日先生の研究室に通っていました。なぜそんなに毎日に通っていたかという理由はとくにありませんが、強いて言えば、一つに気分が落ち着

くような感じがあったからです。

地質調査の面で最初に御指導いただいたのは、四万十帯の第三系の分布する、高知県安芸郡東洋町甲浦周辺においてでした。それは私が二回生の夏休みの時で、その時の調査結果はすでに公表されました。最初は先生のお手伝いをするということで連れて行っていただいたのですが、私にとって地質調査の方法を実際に懇切丁寧に教えていただいたのは、この時が初めてでした。この時の経験がその後の私の進路にきわめて大きな影響を与えたことは間違いありません。その頃すでに、テーマとして四国の四万十帯を構造地質学的にやってみないかというお話が時折ありました。三回生になって、たまたま進論担当の教官の一人に先生が当たり、私の組の調査範囲も偶然に四万十帯を含む地域（佐川南方の仏像構造線に沿う地域）に当たり、これはちょうど良い機会でしたので、いろいろと御討論をお願いしました。ちょうど進論の方が一段落ついた昭和四十九年春、岩石三軸圧縮試験機が入り、その御蔭で先生の御研究の方も一段と幅広いものになり、新たな展望も開けてきたように思いました。そして、将来の研究についての夢みたいなことをよく話して下さったことを覚えています。卒論では、上記の甲浦地域との関連性から、そのすぐ南の地域を

調査するようにと言われました。先生には、かなりの日数の現地指導をしていただきましたが、その頃から沢の調査で水に入った後などに時々膝の痛みを訴えられたことがあり、そのことが大へん気になったことを覚えています。

前にも少し触れましたが、三井研究室では補導生を対象として原則的に週に一回ゼミを行なうことに決めていました。その本当の目的はゼミを行なうことではなく、補導生との対話の場をもつということであったように思います。また三井研究室では、先生と補導生とで月に一回くらいの割合でコンパを行ないました。こんなことからも分かりますが、先生は教官と補導生―学生―とのつながりというものを非常に大切にされました。それは同時に学生一人一人の面倒をよく見て下さったとも言えるのです。私達学生には本当に親身になって相談に乗って下さいました。また、昼休みなどにお茶を飲みながら楽しく雑談したことが大へん懐かしく思い出されます。

先生は、「卒業して五年くらいすればいろいろと相談したいことが出てくると思うので、その時には遠慮なく来なさい」、とよく在学中におっしゃっていたのですが、まだ卒業して二年足らずでそのような相談も出来なくなってしまったことは甚だ残念でなりませ

ん。先生の熱心な研究態度には非常に学ぶべき所があり、これから自分の仕事を進めて行くに当たっては、その態度を大いに見習って行くつもりです。

この四月には日本地質学会が高知大学で開催されることになっていますが、先生はかなり以前から地質学会の高知大学での開催を強く望んでおられまして、その希望もやっとかなったのですが、その開催を目前にして逝去されたことは全く残念なことです。先生のためにも是非とも地質学会を成功に終わらせたいものです。

（石油資源開発ＫＫ）

大きな三井先生と小さな私

佐藤　浩一

入学後のオリエンティションで三井先生の補導生となった私は、補導教官届に印鑑をいただきに三井先生をおとずれた。やや緊張ぎみに入室していった私に先生は自らお茶を出して下さり、やさしく迎えて下さった。大学の先生というと非常にえらい先生方ばかりで、自分にとっては口もきくことのできない遠い存在の方と思っていた私には、先生のそのあたたかみは思いがけないことでした。

この最初のふとしたことがきっかけとなり、その後卒業まで四年間私は三井研の虫のような存在になっていました。補導生コンパ、勉強会、先生のお宅へ招かれた事など色々ありました。三井研の出発当初のメンバーは、大きな体で明るい先生をはじめ、地質一本の小出さん、陽気な紅一点上山さん（旧姓、瓜生田）、親分格の萩原君に、おっちょこちょいの私でした。中でも私は最も先生の手をわずらわせてばかりいたようでした。先生のあたたかさに甘え、言いたい放題自分の主張をしゃべりまくっていたようです。特に地学自体のディスカッションとなると、先生も私もなかなか手を引きませんでした。黒板を前に「あーでもない、こうでもない」といった議論のくりかえしでした。次第次第に先生の声も私の声も大きくなりました。先生は顔を真赤にされ、大きな息をしながら怒鳴っておられました。服ももうチョークで真白けでした。

私は半信半疑首を振りながら下宿へ帰り、ベッドに横になっても『…こうだから、こう……。こう言えば……、先生はこうくる。……ちくしょう。……そんなら、これならどうだ……、いやまて、だめだ……』と必死でした。突如としてベッドから飛び起き、夜を徹

して考えることもよくありました。

朝方になって「やった！よおーし、これなら先生をギャフンと言わせてやれるぞ」。何かひとつの結論を思いついた私は勢い込んで先生のところへまっしぐら。ノックもせずに騒々しく研究室へ入って行き「おはようございます。ハイッ、先生、これではどうですか」といきなり自分のメモを先生にさし出し、黒板にサッサと書きつけるといったことがよくありました。こんなぶしつけな私にも先生は腹立てることもなく、むしろ積極的に大いにディスカッションして下さいました。また、私の考えが未熟で取るに足らないものであっても、真正面から最後まで聞いて下さいましたし、私の誤っているところはていねいに、かつ納得するまで説明して下さいました。このように色々とそうこうあった後、ひとディスカッションを終え、お茶で一服する時には、先生にも私にも非常にさっぱりとした、とてもすがすがしい満足感があったことを今でも鮮明に思い出されます。四年間このようなディスカッションをくりかえし、先生の大きな体にぶつかっては跳ねとばされ、またぶつかっては跳ねとばされしながら、私は地学のおもしろさについて、または現在何が一番問題となっているのか、どうすればその問題はかたづけられるのかなどの点について

考えさせていただいた。先生の地質学は独創的な観があり、世の学説の流行にはあまりとらわれず、基本を忠実に、野外調査を主体とした地質図にもとづく地質学のようでした。その点どちらかというと〝話し好き〟の私には非常に良い勉強になっておりました。

それからもう一点、先生と私との間にあってどうしても忘れられないこととして、私の卒論の件があります。

進論をどうにか終え、卒論を決める時期となった時のことでした。三井先生のもとで、「室戸半島の先端の地質」を岩石学的なことをも含めて総合的に調査してみようと決めていた私に、先生は「お前が卒論でやろうとしていることは良くわかる。しかし、オレにはそれは指導できない。オレはどちらかというとアンチ・プレートだ。お前とは見方がちがう。……お前は良く勉強しており、オレの手から手離すにはおしいが、これからの地質学は岩鉱もある程度できないと上達はしないように思う。……オレは東北大時代、徹底して岩鉱を嫌って勉強しなかった。……そして今ではこのとおり……苦労している。お前はオレのところでやっていることは大体マスターしたように思う。だから……お前の将来のためだ……一度は岩鉱を勉強しておく方が良い……鈴木先生と相談してみるが良い」とおっ

しゃられた。その時の先生のお気持ちは何とも言いようがないほど淋しく、私には良くわかった。私は意外な先生の言葉におどろき、数日考えたすえ、鈴木先生と相談し、岩鉱で卒論をやることに決めた。こうして私の卒論は一転して決まったのであるが、三井先生にはなかなかすんなりとは報告できなかった。

四、五日たってようやく先生に報告に行った。私が研究室に入っていくと先生も大体もう感じとっておられたようで、大変淋しそうでしたし、大変しんみりとしてしまった。先生は「やっぱり岩鉱へ行くか……マッ、頑張ってやれや……ただし、条件といったら変だが、週に一度はここに顔出せよ。……生きてるか、死んでるか、わからんようでは困るから……。それから……たとえ岩鉱へ行こうとお前は三井研の人間だ。研究室のコンパにはいかなることがあろうとも出席しろ……ナ……」とおっしゃられた。私は大きくうなずき、言葉少なにあいさつして研究室をあとにした。部屋を出てしまうと、「ホントこれで良かったのだろうか……これで良かったのだろうか」と何度も考えていると次第に涙が出てきた。後に先生から聞いたのであるが、先生もこの後二日間泣き続けたと笑いながらおっしゃられていた。

私の卒論は大変幸運な事ばかり引き続き、順調に仕上がっていった。つまづいた時には、何度となく三井先生にも見ていただき、数多くの助言をしていただいた。そして卒論発表も無事終わってから、三井研の卒業生追出しコンパが三井先生のお宅で行なわれた。その折、先生は私に「お前とも色々あったが、やっぱりお前は三井研の人間だ。岩鉱へいても岩石をやらずに層序をやったにすぎない。……お前も終始オレのもとを離れられない男やな……」と声高々におっしゃられ、更に「お前のは卒論になっとらん。オレはあんなのじゃ、卒業させん。……ダメ!!…第一、地質図がきちんとできてない。あれじゃ、うちの娘のマンガみたいなもんだ。……」

私は散々コケにされましたが、怒鳴られているうちに涙がでてきました。先生の期待に反し、先生のもとを去った私、先生にとっては放っておいて良いはずの私。そんな私のありとあらゆる面において細々と先生は気を配って下さっておられたのです。私はもう何も言う言葉がありませんでした。ただただ自分は本当に良い先生にめぐり合えて幸福者だと感じ入っていました。

このように、私の大学時代は三井先生なくして考えることができないくらい色々と面倒

をみていただきました。

先生の大きな体にちょろちょろとつきまとっていた小さな私には、その先生が突然病魔に侵され早逝されたことなど、今だに想像さえできません。三井研に入って行きさえすればいつものようにあの大きなイスに先生がドカッとすわっておられ、「オッ、来たか」とやさしく迎えて下さるような気がしてなりません。

ここに謹んで哀悼の意を表し、先生の御冥福を心から祈る次第です。

（大阪府鳳高校）

先生のこと

萩原　一憲

入学後すぐ補導教官が三井先生に決まった。私ははじめこの先生が大学の教官であるということに疑いをもった。なぜなら、私が以前からえがいていた大学教官のタイプとおおよそかけはなれた風貌であったからである。同時に私は大学教官というのは学問ばかりしているから青白くて弱々しいものであろうという先入観がまちがっていたのかもしれない

と思った。今から考えるとやはり先生は変っていたのだが。何日かして私達（もう一人補導生に佐藤という男がいた）は先生の研究室に呼ばれた。そこには先生の他に二回生の補導生の小出、瓜生田両人がいた。そこで先生は私達に補導教官と補導生について説明してくれた。つまり補導教官とは親元をはなれて生活する学生の話し相手であり、単位を取っていない学生だと尻をたたいて勉強させる役目をもったものだということだった。そして週に一度位は生きているのか死んでいるのか知りたいから、学習会ということで集まろうと提案され、いつのまにかそういうことになった。私はクラブと寮の関係で休むこともあったが、佐藤という男は馬鹿がつく程真面目であったから、何年かはこの学習会も続いたようである。補導生コンパはとぎれることなくやった。年に四、五回はやったのではないかと思う。学習会がつぶれて酒の席に早がわりしたことも何度かあった。場所は研究室や先生のお宅をおかりした。酒の席では佐藤という男と先生がよく言いあいをした。どちらも大酒のみである上に、学問に関しては一歩もゆずらないたちであるから、それが始まると手のつけようがなかった。酒の席がおそくまで続くのは、たいがいこのためであった。そうなると他の者はそこにいても面白くないから、横の方でごろごろしたり、五目並べを

したりして時間をつぶした。酒の席のおひらきがパッとしなかったのは毎度のことであった。ある時コンパが終わって、佐藤という男が大変酔っていたので、先生と私が彼を下宿まで送ろうということになった。しかし道が大変暗くて、佐藤という男がそばのドブに落ちこんで、それを助けようとした先生が石につまづいてころんで泥だらけになった。三人とも大笑いであったが、他の人間が見たらこれを大学教官と学生だとは誰も思わなかったにちがいない。先生のお宅には酒会のためだけでなくよくおじゃました。四月の下旬になると〝鯉のぼり〟を立てるのを手つだいにいった。佐藤や小出先輩は庭づくりも手伝ったようである。その度に先生の二人のお子さんとは遊んだものだ。最近では姉さんの方に名前も呼びすてにされる。弟さんがまねをする。三人であばれることも度々あった。先生もお子さんと遊んでいる時は全てを忘れているようであった。

卒論に入って私だけが先生につくことになり、室戸へはよく一緒に歩いてもらった。旅館も先生の知り合いをさがしてくれて、安く泊まれることになった。二人でよく東洋町までバイクをとばして抜きあいをやったものだ。先生は大学の教官であり、あまり違反するわけにはいかないからビクビクものだ。もっとも先生のバイクはポンコツに近かったか

ら、スピードは余りでなかったようである。先生のバイクに関して面白い話がある。これも室戸に行った時であるが、最初から先生のバイクは調子が良くなかった。途中でスピードが出なくなるのだ。でも調査は私のバイクに二人乗りしたりしてなんとか終った。問題は高知に帰ることである。バイクを旅館においておくわけにはいかない。そんなことをするとすぐ通勤にこまるし、こんど室戸に行く時もこまることになる。まあ時速四十キロも出ればいいだろうと、二人とものんきであるから、昼すぎに旅館を出た。なんと先生は時速九十キロで先をゆくではないか。私はついてゆくのがやっとであり疲れたが、思ったよりバイクの調子がいいので安心した。ところが十分もすると今まで遠くにしか見えなかった先生のバイクが突然目前に迫った。なぜとまったのだろうと、不思議がりながら追いついてびっくりした。先生のバイクは止まっているのではなくて、フルスロットルでとばしているのだ。時速たったの二十キロ。それから二人で長い旅がはじまった。途中先生は点火プラグを一回かえ、ガソリンを二回入れた。結局三時間で帰れるところを八時間位かかった。先生は大変申し分けなさそうな顔をしていた。先生が新しいバイクを買ったのはそれから何日もしない間であった。先生は新しいものしか買わないたちであった。なんとあの

オンボロバイクも新車だったらしい。よくあれ程まで乗ったものだ。相当山を歩いたに相違ないと善意に解釈していただきたい。

四回生の間は私と先生の二人きりであったから、研究室や旅館ではよく話した。それも不思議と専門の話は少なく世間話が多かった。先生の得意な話は相撲、野球、政治に関することである。先生の好きな野球チームは巨人であり、私と意見が一致した。先生は青田昇が好きだったらしい。私はよく悩み事を打ちあけた。それは両親や友人にも言えないことである。先生はそれでも自分の経験をふまえて相談にのってくれた。私は先生から学問だけをおそわったわけではない。人生に関していろいろなことをこの五年間で学んだと思っている。先生が最初私達に話してくれたことがやっと今わかった。やはり先生は私達の相談相手であり、親がわりであった。私はこの五年間先生におそわったことをきっと社会に出ても肝に銘じて生きてゆこうと思っている。先生、五年間本当にありがとうございました。安らかにお眠り下さい。

（近畿ボーリングＫＫ　名古屋事務所）

あとがき

三井先生追悼文集の原稿をお願いしましたところ、皆々様には心よくお引受け頂き有難うございました。お蔭様にてこの度ようやく出版できました。

ささやかな小冊子ではありますが、この書がやがて善枝（よしえ）さんや巌（いわお）君の心の寄りどころとなり、また私達が三井先生を偲ぶ縁（よすが）ともなれば何よりと存じます。

原稿の校正にはその道でも特技のある畏友鎌田泰彦君（長崎大学）の手を煩わせました。同君は、三井先生の十六年先輩であり、また東北大学時代には同じ常磐炭田を研究対象とされていたのも奇しき因縁でしょう。またこの事業（三井忍氏遺児育英基金募金事業を含め）を推進するのに、私の部屋の研究補佐員であった松下幸代さんや、現在の下田博子さんには種々お手伝いをして頂きました。これらの方々の御協力に深謝致します。

最後に、今夏、奥様や善枝ちゃん・巌君を仙台に訪ね、三井先生の初盆の霊前に額（ぬか）づく機会を得ましたので御報告申し上げます。

奥様や善枝ちゃんや巌君はすっかり元気をとりもどされ、仙台駅からバスで約四十分の

広々と展開した田園中の、奥様の実家の大きな屋敷内の一隅に新築されたばかりの二階建ての居宅に、御親族の方々に暖かく見守られての新生活に入っておられる御様子でした（住居は、宮城県名取市高館熊野堂岩口下九九、三井妊子）。

ただ奥様から、「子供達が時々パパの寝言を言ったり、何かにつけて『これは父さんに買ってもらったんだよ』と、皆に自慢げに話すのを見ると、なかなか忘れられないですね」と、目を伏せておられました。人一倍子煩悩だった彼は、思い出の仙台で、善枝ちゃんや巌君がすくすくと育っていくのを見守っていることでしょう。

最後になりましたが、奥様は、東北大学理学部地質学教室の北村信教授の御世話で、仙台市内の日本工営ＫＫ東北支店に勤められ、御元気に第二の人生を踏み出しておられることを付記致します。

昭和五十二年八月二十五日

高知大学理学部地質学教室
甲　藤　次　郎

三　井　忍　教授　追悼文集
昭和五二年一一月二四日　印刷
昭和五二年一一月二五日　発行
発行者　高知大学理学部地質学教室
（代表　甲藤次郎）
印刷所　高知印刷株式会社